ソローの初期の伝記作家

—— Alexander Hay Japp ——

松　島　欣　哉

Abstract

Alexander Hay Japp, a Scottish publisher and litterateur, published *Thoreau : His Life and Aims* in 1877, a second biography of Thoreau after Channing's. Indeed his biography has some defects, but we should appreciate his attempt to depict a full picture of Thoreau against Emerson's and Lowell's biased ones. He was the first critic who depicted an ecologist Thoreau by pointing out that Thoreau was a "reconciler" of men and Nature.

1　はしがき

Alexander Hay Japp（1837－1905）は、スコットランド生まれの著述家・出版者である。ジャップは本名以外に、H. A. Page, A. F. Scot, E. Conder Gray, A. N. Mount Roseというペンネームを使って執筆した。彼はたくさんの著作を残したが、その主なものは、*Memoir of Nathaniel Hawthorne, with Stories Now First Published in This Country*（1872）, *Thomas De Quincey : His Life and Writings, with Unpublished Correspondence*（1877）, *Thoreau : His Life and Aims*（1878）, *Animal Anecdotes Arranged on a New Principle*（1887）, *Robert Louis Stevenson : A Record, an Estimate, and a Memorial*（1905）等である。本論では、『ソローその生涯と目標』を中心に、彼のソロー論を再評価してみたい。

2　ジャップのソロー論

i）チャニングのソロー伝書評として

ジャップは『ソローその生涯と目標』を公刊する３年前に、"Henry Thoreau, the Poet-Naturalist. By W. H. Channing, D.D." と題する評論を、季刊誌 *British Quarterly Review* の1874年１月号に無署名で発表している。これは、前年の1873年にソローの親友で詩人であった William Ellery Channing（1817－1901）が出版した、*Thoreau : The Poet-Naturalist* の紹介文のような表題を取っているが、実際はジャップ自身のソロー論である。彼は『ソロー　詩人・博物学者』の著者を、「W. H. チャニング，神学博士」と誤記しているが、詩人チャニングのいとこで、1854年以降おもにイギリスで活動したユニテリアン派の牧師 Willam Henry Channing（1810－1884）と混同したものと思われる。[1)]

ジャップはソロー論を書くに至った契機を、『ソローその生涯と目標』の「序文」で、「私が携わっていたある特定の研究のために、ソローとしばしば接触することになった」と述べている。[2)]「ある特定の研究」とは、ソローとも親交のあった Nathaniel Hawthorne（1804－1864）に関するも

ので、1872年に H. A. ページのペンネームで出版された『ナサニエル・ホーソーン伝』がその結実である。彼はその中でソローを、「最高の頭脳を持った男だが、(中略) 習癖においては人間と獣の間に位し、(中略) 両者を何か共感や良好な相互理解といったものへいざなう、ある被造物のようであった」と評した。(*Memoir* 55) しかし、ソローの著作や彼の友人たちの文章を読むうちに、この評言がソローの全体象を表さず「誤解を招きかねない」と思い至った。[3] そこで、著述家の良心からであろうか、チャニングの『ソロー　詩人・博物学者』の記述を借りながら、イギリス人がソローについて一般に抱いている「森の半野蛮人」という「ソローについての全く大間違いの説明」(Japp1874 182) を訂正しようと、彼自身のソロー論を展開したのである。

このソロー論でジャップは、「ソローをウオールデンへと導いたのは、一例を挙げれば、ルソーの考えとは正反対の考えだった。彼がそこへ行ったのは人間から逃れるためではなく、覚悟を決めて人間と相対するためだった」(183) と言い、また、「ソローは個人主義者として自然へ赴き、社会の預言者として帰ってきた」(192) と言って、ソローが決して「隠遁者」ではないことを強調する。*Walden* が発売される直前の1854年 7 月29日、ソローの代理人を務めたこともある Horace Greeley が、編集長をしている日刊紙 *New York Tribune* で「マサチューセッツのある隠遁者」と題して紹介して以来 (Scharnhorst 24)、[4] ソローのイメージは太平洋の両岸で「禁欲的な隠遁者」というものが主流となった。それに対しジャップは、「彼[ソロー]の偉大な特質は共感であった」(Japp1874 189) と述べ、ソロー自身の著作からはもちろん、チャニングの伝記とエマソンの追悼文から、ソローの自然についての知識や動物に対する愛情を示す文章、若者との愉快な交わりを示す文章などを引用し、彼のソロー論を展開したのだった。

ii)『ソローその生涯と目標』

1874年のソロー論は、いくつかの雑誌で好意を以て受け入れられたので、ジャップはソローの「より充実した肖像」(Japp1878 ix) を読者に提供すべく、『ソローその生涯と目標』を発表した。この時彼は H. A. ページというペンネームを使った。Raymond Borst によれば、1877年にボストンの James R. Osgood 社から著者版として出版されたアメリカ版は、本文が234ページからなるようだが(Borst 58)、[5] 1878年にロンドンの Chatto and Windus 社から出版されたイギリス版は、5ページ分の「序文」と271ページの本文からなっている。ただし、Gary Scharnhorst は両版とも本文のページ数を271ページとし、イギリス版の出版年をアメリカ版と同じ1877年としている。(Scharnhorst 70) [6]

『ソローその生涯と目標』が出版されると、アメリカとイギリスの30を越す雑誌や新聞で取り上げられたが、必ずしも好評を以て受け入れられたわけではなかった。なぜなら、この伝記は欠点の方が目に付くからだ。

その第一は、ロンドンの週刊誌 *Examiner* が指摘したように (Scharnhorst 177)、構成のまずさである。『ソローその生涯と目標』は二部からなり、第一部ではチャニングの伝記や Ralph Waldo Emerson の追悼文を利用しながら、ソローの生涯を時間を追って記述するとともに彼の作品と思想を紹介し、第二部ではさらに自然と社会との関わりから彼の思想や性質を詳しく論じようとしたものと思われる。しかし、どちらの部分もソローの作品からの引用を多量に含んでいるために、ジャップの意図がぼやけてしまっている。

ジャップは『ソローその生涯と目標』において、引用の出典をほとんど示していないが、ある引用においては意図的に歪曲する過ちを犯した。ジャップは、*Fraser's Magazine* に掲載された匿名の記事から、ソローが子供たちと一緒にスイレンを集めに行ったときに、素手で魚を捕まえ驚く子供たちに見せた、という逸話を紹介している。([Conway] 464) この記事の著者が「その秘訣をその

時は彼［ソロー］から得ることはできなかった」と言っているのに続けて、ジャップは「秘訣を十分に説明することはその芸当以上にソローにはむつかしかったことだろう」とコメントを加えている。(Japp1878 64－65) しかし、この記事を書いたMoncure Daniel Conway は、『ソローその生涯と目標』が発行されると時を置かず、ジャップが引用を終えた部分のすぐ後にソロー自身がその秘訣を明かした記述（*A Week on the Concord and Merrimack Rivers* の「土曜日」の章にある）を、彼自身は挿入しているにもかかわらず、ジャップがそれを無視し彼の記事を歪めて引用したことを非難し、「こんなふうに神話は作られるのだ」と憤った。(Conway 340)

ジャップはまた、ウオールデン湖の畔に建てたソローの小屋が逃亡奴隷の支援組織である「地下鉄道」の「駅」だった、という作り話が横行する原因を作った。Samuel Arthur Jones が指摘したように (Glick 120)、チャニングの伝記の中の「ソローの個人的援助によってカナダへ送り出された奴隷は一人だけではなかった」(Channing 90) という言葉を歪曲し、ジャップは「ウオールデンにいたとき彼［ソロー］は、個人的援助により、複数の奴隷を助け『北極星の方へ』向かわせた」(Japp1878 106) と書いたのだった。その結果、ソローの小屋は「地下鉄道」の「駅」だというまことしやかな嘘が繰り返されたのだった。しかし、これが事実でないことをジョーンズは証明している。(Glick 121)

以上のように、『ソローその生涯と目標』には欠点がいくつか見られるが、ジャップは、ソローについて一般に信じられ、「最近その筋の大家により厚かましくも繰り返された」、「ソローは病的な自己中心主義者で、感傷家で、世捨て人だ」という非難 (Japp1878 125) [7] を覆そうとした最初の批評家であった。

ジャップは「序文」で「私は主にこの男をして語らしめようとした」(x) と言っているように、ソローの多くの著作から多量に引用した。引用は本文約270ページの内200ページ近くを占めている。その一覧を発表順に示せば以下のとおりである。

1. "The Natural History of Massachusetts" (1842)
2. "A Walk to Wachusett" (1843)
3. "A Winter Walk" (1843)
4. "The Landlord" (1843)
5. "Thomas Carlyle and His Works" (1847)
6. "Civil Disobedience" (1849)
7. *A Week on the Concord and Merrimack Rivers* (1849)
8. "Slavery in Massachusetts" (1854)
9. *Walden* (1854)
10. "A Plea for Captain John Brown" (1860)
11. "The Last Days of John Brown" (1860)
12. "The Succession of Forest Trees" (1860)
13. "Walking" (1862)
14. "Autumnal Tints" (1862)
15. "Life Without Principle" (1863)
16. *The Maine Woods* (1864)
17. *A Yankee in Canada, with Anti-Slavery and Reform papers* (1866)

さらに、ソローの詩５篇と、チャニングが伝記で利用した『日誌』の記述とを引用している。

上記の一覧からもわかるように、ジャップはソローの全体像を読者に示そうと試みている。ジャップの論点は、

1）ソローが非を鳴らしたのは、文明や人間に対してではなく、文明によって人間社会にもたらされた害悪に対してであり、彼は決して人間嫌いではなかった

2）ソローは博物学者であるが基本的には詩人であるので、自然を冷徹な科学者としてではなく、詩人として共感をもって眺めた

3）James Russell Lowell が言った「ソローにはユーモアがない」というのは間違いで、ユーモアを含んだ記述はたくさんある

4）ソローの黒人奴隷に対する博愛的関心は、自然をとおして得たものだ（これは、ローウェルの「自然との孤独な交感はソローへの影響の点で健康的あるいは甘美であったようには思えない」（Glick 44）という結論に対する反論でもある）

といった点に纏められよう。

『ソローその生涯と目標』のもう一つの特徴は、ソローの動物との親密な交流を、アッシジの聖フランチェスコのそれと引き較べた点にある。当時の雑誌は「奇想天外だ」（*Atlantic Monthly* 誌（May, 1878））とするものと、「公正だ」（*Spectator* 誌（20 October, 1877））とするものと、正反対に分かれた。（Scharnhorst, 177, 172）ジャップは、先に指摘したように、コンウェイの逸話を歪曲しソローの魚に対する影響力を神秘化しようとした。ジャップによるソローと聖フランチェスコとの比較は、後者の持つ聖性を前者に分有させることを可能にし、またそれがジャップの狙いであったように思える。Lawrence Buell が本書を「聖人伝」と呼ぶのももっともなことだ。（Buell 331）20世紀に入っても、Joseph Wood Krutch が *Great American Nature Writing*（1950）の導入論文で両者を比較し（ただし、クルーチはソローに聖フランチェスコの聖性を分有させるためにそうしたのではない）、また、Bill Devall と George Sessions が *Deep Ecology*（1985）で、両者に John Muir を加え彼らの研究を勧めている。（Buell 331, 545）環境保護思想や環境倫理思想が高まるなかで、ソローはその根本に位置する作家・思想家の一人と目されている。そのような中で、『ウオールデン』が聖書化されソローが教祖化されそうな勢いである。ジャップのソローと聖フランチェスコとの比較は「奇想天外」どころか、崇拝の対象となる人物の同質性の指摘として、瞠目に値しよう。

3 まとめ

ジャップの『ソローその生涯と目標』は、チャニング、エマソン、コンウェイなどの逸話をもとに、ローレンス・ビューエルが言ったように、ある種ソローの聖人伝となっている。しかし、エマソンがその追悼文で描いた厳格な禁欲主義者というソロー像や、ローウェルが描いた病的でユーモアがなく自惚れの強い自己中心主義者というソロー像を訂正し、より全体的なソロー像を打ち立てようとした最初の著作として、ジャップの『ソローその生涯と目標』は記憶されるべきである。また、ソローを自然と人間との「仲介者」（reconciler）（Japp1874 191, Japp1878 248）と捉えエコロジストとしてのソロー像を提出した先駆者という点で、我々はジャップを再評価すべきである。

『ソローその生涯と目標』は、内容は1878年のものと同じであるが、1901年にチャトー・アンド・ウィンダス社から、扉に「新版」と名うって再出版された。もしかすると、この再版が1900年代初頭にイギリスでおこったソローブームに一役買ったかもしれない。

註

1）ただし、『ソローその生涯と目標』ではチャニングの名前は "Mr. W. E. Channing" と訂正されている。また、ジャップはソローの没年および命日を、1862年5月6日ではなく、1861年5月8日と誤記している。

これは『ソローその生涯と目標』にも引き継がれている。Cf. *Thoreau : His Life and Aims,* 123.

2）*Thoreau : His Life and Aims* (1878. Rpt. New York : Haskell House, 1972), vii. 以後、本書からの引用は、本文中の括弧内に Japp1878 と略記した後にページ数を示して記す。

3）"Henry Thoreau, the Poet-Naturalist. By W. H. Channing, D.D." *The British Quarterly Review,* 59 (Jan., 1874), 181. 以後、本記事からの引用は、本文中の括弧内に Japp1874 と略記した後にページ数を示して記す。

4）Cf. *Thoreau Society Bulletin,* 11 (April 1945), 3.

5）なお、ボーストはイギリス版の存在に言及していない。

6）ただし、筆者が使用したイギリス版のリプリント版の扉には出版年が1878年とある。アメリカ版を実際に手に取って見ることはできなかったので、筆者には両版の間に内容上の違いがあるかどうかはわからない。

7）これは、恐らく1865年に *North American Review* に発表したソローを揶揄する評論を、1871年に出版した *My Study Windows* に再録した、James Russell Lowell を指していると思われる。

引用・参考文献

Buell, Lawrence. *The Environmental Imagination : Thoreau, Nature Writing, and the Formation of American Culture.* Cambridge, Ma. : Belknap Press, 1995.

Borst, Raymond R., ed. *Henry David Thoreau : A Reference Guide 1835－1899.* Boston : G. K. Hall, 1987.

Channing, William Ellery. *Thoreau : The Post-Naturalist.* Ed. F. B. Sanborn. 1902. New York : Biblo and Tannen, 1966

Conway, Moncure Daniel. "Myth-Making." *The Nation* 26 (May 23, 1878) : 340.

[Conway, Moncure Daniel.] "Thoreau." *Fraser's Magazine* 73 (April, 1866) : 447－65.

Glick, Wendell, ed. *The Recognition of Henry David Thoreau : Selected Criticism Since 1848.* Ann Arbor : University of Michigan Press, 1969.

[Japp, Alexander Hay.] "Henry Thoreau, the Poet-Naturalist. By W. H. Channing, D.D." *The British Quarterly Review,* 59 (Jan., 1874) : 181－94.

Johnson, Allen, and Dumas Malone, eds., *Dictionary of American Biography.* New York : Charles Scribner's Sons, 1929, 2 ; 2 : 9－10.

Jones, Samuel Arthur. "Thoreau and His Biographers." *Lippincott's Monthly Magazine* August 1891 : 224－28. Rpt. in *The Recognition of Henry David Thoreau,* 119－25.

Lee, Sidney, ed., *The Dictionary of National Biography, Supplement January 1901－December 1911.* 1912 ; [London] : Oxford UP, 1966, 2 : 362－363.

Lowell, James Russell. "Thoreau." *North American Review* October 1865 : 597－608. Rpt. in *The Recognition of Henry David Thoreau,* 38－46.

Page, H. A. [Japp, Alexander Hay] *Memoir of Nathaniel Hawthorne, with Stories Now First Published in This Country.* London : Henry S. King, 1872.

_____. *Thoreau : His Life and Aims.* London:Chatto and Windus, 1878. Rpt. New York : Haskell House, 1972.

_____. *Thoreau : His Life and Aims.* London : Chatto and Windus, 1901. Rpt. Folcroft : Folcroft Press, 1969.

Scharnhorst, Gary, ed. *Henry David Thoreau : An Annotated Bibliography of Comment and Criticism Before 1900.* New York : Garland Publishing, 1992.

Thoreau Society Bulletin : Numbers 1－100. New York : Johnson Reprint, 1968.